

提督の不
豫と贈藥

活能く談ず、次て喀什噶爾提督焦大聚氏を訪問せんとするや、偶々湯參將來訪し、且つ同氏の談に因りて、提臺の不豫を知り、其の病症を問へば、下痢なりと答ふ。因て試みに予が携帶の藥料を參將に託して贈る。而して夕刻衙門を辭し、馬を馳せて疏附縣衙門に知縣錢炳煥氏を訪ひ、縣官設備の公館に投宿す。

九日、早朝錢知縣來訪す、次で予は喀什噶爾道臺袁鴻祐、露國領事コロコルフ、英領印度貿易事務官マカートニ、協臺揚德俊の諸氏を各衙門に訪問せり。

十日、昨日訪問せし各官相前後して來訪し、茲に公式の應答を畢り、爾後滞在間、相互往復殆んど虚日なし。殊に英官マカートニ氏とは數次往來せり。同官は予が崑崙通過、印度旅行に就き、滿腔の至誠を以て、斡旋の勞を執られしは、深く感謝する所とす。

故郷への
通信

十一日、松石大佐及留守宅等へ發信。此の書信は、英官マカートニ氏に託し、印度を経て郵送す。但しカシミヤ、喀什噶爾間の通信は、毎月三回當地發送の定めにて、當日は其の定日なればなり。

大谷光瑞伯に打電す。蓋し長安分袂の際、特に予に囑して、喀什噶爾安着の時、一